

火宅の人

—— 映画文学人生論

原作：壇一雄（1975年） 脚本：神波史男 深作欣二
監督：深作欣二（1986年） 撮影：木村大作
出演：桂一雄 緒方拳 音楽：井上堯之
桂一雄の母 壇ふみ 太宰治：岡田裕介
桂一雄の妻 石田あゆみ 中原中也：真田広之
矢島恵子 原田美枝子 葉子 松阪慶子

煩惱に身を焦がし不安の絶えないさまを
火災にあつた家にたとえて火宅という

『火宅の人』の作者は無頼派の壇一雄。昭和二十三年に玉川上水で心中した太宰治の仲間だが、太宰に比べると健康で、生命力が強い。享年六十三——無頼派作家にしては長寿だ。

深作欣二監督の映画を観ると、太宰治（岡田裕介）と一緒にガス自殺をしようと誘ったとき、壇一雄がモデルの桂一雄（緒方拳）は窓を開けて空気を入れてしまい、「きみはやはり生きる側にいる人間なんだね」と太宰から嘲けられていた。

原作にはそんな場面はないが、昭和三十一年八月七日、青森県蟹田で太宰治の文学碑の除幕式が行われ、一雄も参列した。その際、新劇女優の恵子（原田美枝子）を連れていったのは如何なる因縁によるものか。

数日後、石神井の家に帰宅すると、「恵さんと事を起こした」と、馬鹿正直に妻（石田あゆみ）へ報告した。妻は怒り、家出する。長男の太郎は先妻の子、次男の次郎は小児マヒの障害児、そのほかにまだ幼い弥太、フミ子、サト子と五人の子どもがいる。

まさに火宅の人であるが、父は子どもたちを二人の女中と一人の看護婦にまかせ、新劇女優と暮らすことにした。サラリーマンの月給が一万円程度の時代に連載小説を十篇以上書き散らして月収約百万円の流行作家だからそんなこともできる。



火宅の人

映画文学人生論

それにしても並の神経の持主には耐えられそうもない無茶苦茶な生活ぶりだ。酒は浴びるように飲み、女は新劇女優だけではなく、管野もと子とも瀬野セイとも葉子（松阪慶子）とも事を起こした。捕鯨船で南氷洋へ行ったり、海外旅行をしてアメリカやフランスで乱痴気騒ぎを繰り返す。

この男の取り柄をあげるとすれば、料理が上手なこと、水泳などのスポーツが好きなこと、それに、「天然の旅情」に正直なこと位か。

摩訶不思議な現象は、こんな無茶苦茶な男にひどい目にあわされた女たちや子どもたちが仕事に協力している事実だ。原稿の締切りが遅れそうになれば、口述筆記するのは新劇女優であったり、別居しているはずの妻だったりする。

死後につくられた映画の企画協力者の一人は、作中で非行少年として描かれた長男の壇太郎。また、抱かれてオシッコをしながら、

「チチ帰った？」 「うん帰ったよ」

「もうドッコも行かん？」 「うん、ドッコも行かん」 「もう、ドッコも行く？」 「うん、ドッコも行く」という会話を父とかわす二歳のフミ子は映画では作者が十歳のとき、現実に家出して、男のもとに奔った母（壇ふみ）を演じている。

この火宅の一族の遺伝子の配列はいったいどうなっているのだろうか。

煩惱に身を焦がす空大夕焼